

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：13904

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05674

研究課題名(和文) アジア太平洋諸国における手話の対照言語学的研究：外国手話事典の編集をめざして

研究課題名(英文) A Contrastive Linguistic Study of Sign Languages in Asia and Pacific Countries: Editing a Guidebook for Foreign Sign Languages

研究代表者

加藤 三保子 (KATO, MIHOKO)

豊橋技術科学大学・総合教育院・教授

研究者番号：30194856

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本手話を含めた8つのアジア太平洋諸国・地域で述べ56名のろう者の手話表現を収録した語彙の中から、22語(家族表現11語、生活基本語11語)に焦点をあて、各国の手話語彙を対照言語学的観点から比較研究した。いずれの手話言語にも、地域差、年齢差、男女差などがあり、貴重な手話データを収録することができた。同時に、語源が共通している手話語彙(例えば、お金や病気など)が確認できた。8つの手話言語の分析結果から、写像性が高い手話言語の特徴が改めて浮き彫りになった。また、今回の調査国・地域の手話言語には、いくつかの言語系統が存在することもわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル社会において、来日する外国人ろう者や、海外へ出向く日本人ろう者が増加しており、ろう者どうしの国際交流は年々盛んになっている。今後、アジアのろう者はさまざまな国際的会合を組織し、手話を使った交流の機会を増進するであろう。このような場では、お互いに相手の手話を学習しあう必要がある。本研究の成果は、そのための一助となることを目的としている。別途発行した報告書には実際の手話の動画DVDを添付し、丁寧な解説とともに各国の手話を紹介している。各国手話語彙の対照言語学的分析の結果も含め、日本のろう者・手話通訳者・手話学習者等らがアジア太平洋諸国の手話を学習する際には、本研究の成果が活用できる。

研究成果の概要(英文)： In this study, we video-recorded the sign language expressions of 56 Deaf people living in 8 Asia-Pacific countries and regions including Japanese sign language, and focused on 22 words (11 family relation words, 11 everyday expressions). The sign language vocabulary of each country was comparatively studied from the view point of contrastive linguistic study. There are regional differences, generation differences, and gender differences in all sign languages, we were able to record valuable sign language data. At the same time, we confirmed sign language vocabulary with common etymology (eg Money, Illness, etc.). From the analysis results of eight sign languages, the features of sign language with high image clarity have been highlighted. Furthermore, We found that there are several language families in the 8 countries and regions.

研究分野：社会言語学

キーワード：手話 アジア太平洋諸国の手話 外国手話 手話の対照言語学的研究 家族関係の手話表現 生活基本語の手話表現

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル社会において、昨今は来日する外国人ろう者や、海外へ出向く日本人ろう者が増加しており、ろう者どうしの国際交流は年々盛んになっている。1993年に国際的な取組みとして国連アジア太平洋経済社会委員会(UNESCAP)が「アジア太平洋障害者の十年」を開始したのを契機に、一般財団法人全日本ろうあ連盟(当時は財団法人全日本ろうあ連盟)はアジア各国のろう団体の関係者を招へいして「アジアろう者リーダー研修事業」を立ち上げた。また、連盟傘下に日本手話研究所(現在は、全国手話研修センター日本手話研究所)が設置され、諸外国の手話研究がスタートした。このように、日本のろう者が海外のろう者と交流する機会の増加にともなって、諸外国の手話に対する、ろう者と聞こえる人の関心は高くなった。

そこで、本研究グループでは、アジア太平洋諸国に赴いて、地域・年齢・性別のバランスに配慮しながら、各国のろう者に面談し、収集した手話を対照言語学的観点から研究することにした。なお、「その国特有のものはその国の言葉で」という自称尊重のルールに基づいて、各国固有名詞手話(世界遺産や国家を代表する人物名等)の手話収録も行った。

2. 研究の目的

1) アジア太平洋諸国の手話の語彙構造に関する調査分析:

アジア太平洋地域(北東および東南アジアと太平洋地域)において、ろう者が日常的に使用する手話語彙(普通名詞と固有名詞手話)を収集し、語彙の語源や語構造を分析する。

2) アジア太平洋諸国の手話語彙に見られる類似性の研究: 各国の手話語彙に見られる表現の類似性を、一般言語学的・社会言語学的観点から考察する。

3) 『アジア太平洋諸国手話事典』(仮称)の編集: 対照言語学的観点から、各国の普通名詞手話を分析した結果をまとめ、各国手話事典を編集する。また、2020年(平成32年)の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、別途、成果の一部で冊子『アジア太平洋諸国手話ガイドブック』を編集し、全国のろう者団体に配布して、ろう者の国際交流促進に役立てる。

3. 研究の方法

現地で収録したのは、日常生活語彙、固有名詞、数字表現など80単語ほどに及んだが、今回分析対象としたのは22単語(家族関係11語、生活基本語11語)である。別途発行した報告書では、各国の手話表現を紹介し、手話の類似性や変種の分析結果を記載した。実際の表現を収録したDVD2枚も作成し、セットにして報告書に添付した。調査地等の詳細と分析対象語彙は以下に示す。なお、各国手話との比較のため、関東(東京)と関西(京都)のろう者にも分析対象語彙を手話表現してもらい、日本手話としてデータに加えた。

< 調査地・調査日・収録人数 >

調査国・地域	調査日	収録人数
中国(北京、上海)	2016年8月7日～8月13日	8人
中国(広東)	2017年6月25日～6月27日	1人
マカオ	2017年1月21日～1月23日	2人
台湾(台北、台南)	2017年1月2日～1月7日	8人
韓国(ソウル、アサン)	2017年3月8日～3月17日	5人
フィリピン(セブ、サマール)	2018年1月31日～2月5日	11人
ベトナム(ホーチミン、ダナン、ハノイ)	2019年1月18日～1月26日	12人
フィジー(スバ、ラウトカ)	2017年8月31日～9月8日	9人

< 分析対象語彙 >

家族関係	男	生活基本語	トイレ
	女		名前
	家族		わかる
	夫		わからない
	妻		ありがとう
	父		お金
	母		病気
	祖父		誰
	祖母		何
	息子		いつ
	娘		どこ

4. 研究成果

本研究では、日本手話を含めた8つのアジア太平洋諸国・地域の手話言語を収録し、22語(家族表現11語、生活基本語11語)に焦点をあてて、それぞれの語彙の特徴について考察した。いずれの言語も、1カ国1手話表現ではなく、地域差、年齢差、個人差があり、辞書では得られない貴重な手話データを収録することができた。同時に、「お金」「病気」の表現では、どの言語でも、語源が共通している点も示すことができた。例えば、「お金」では、丸い硬貨を示すか、紙幣を数える表現で共通しており、「病気」では、どの言語でも、脈をはかるか、額を触るか、その両方を組み合わせた表現であった。このように、写像性が高い手話言語の特徴が8言語の語彙分析によって示された。また、その国の言語使用の様式に大きく影響を受けている手話の存在も明らかになった。例えば、「トイレ」の表現は、音声言語でも隠語であったり、遠回しに表現したりすることがある。今回の調査では、「Water Closet」に由来する「WC」と表現するか、手を洗う動作が多かったが、フィリピンでは「Comfort Room」というフィリピン独自の英語でトイレを表現することから、ろう者の手話表現もこの影響を受け、指文字で「CR」と表現された。以下にフィリピンのサマールで収録した「トイレ」の表現(3動作)を紹介する。

フィリピン手話の「トイレ」



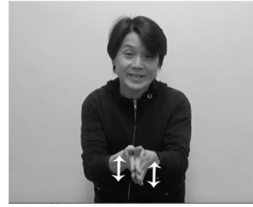
動作説明：人差し指と中指で作った「R」の手型を両手に作り、左右に一回振ったあと、片手の全指を曲げて「C」の手型を作り、もう一度片手で「R」の手型を示す。

また、日本と台湾では、「WC」と「手洗い」の使用法に男女差があり、男性は「WC」を、女性は「手洗い」と表現する傾向にあった。しかし、中国では基本的に表現に性差はないようであった。一例として、日本手話の「WC」(男性)と「手洗い」(女性)の表現を以下に示す。

日本手話の「トイレ」



動作説明：親指と人差し指で「C」の手型を作り、残りの指を立てて「W」の手型を作る。



動作説明：身体の前で両手をこすり合わせる。

限られた時間の中での収録および分析だったため、今後、研究を継続してさらに解明すべきことはあるものの、アジア太平洋諸国の手話は、非常に多様であり、いくつかの異なる言語系統があることがわかった。22語の類似点および相違点から、1.中国手話とマカオ手話、2.日本手話、台湾手話そして韓国手話、3.アメリカ手話からの影響を受けたフィリピン手話、4.イギリス手話系言語、アメリカ手話から影響を受けたフィジー手話、5.ベトナム手話の、少なくとも5つの系統がある。これは、ろう教育およびろう社会の歴史と深く関係しており、それぞれ国の音声言語の影響を受けながらも、音声言語と手話言語の発達過程が異なることがわかる。また、一国内でも地域差があらわれていることも確認され、これも国内移動の制約やろう学校の設立状況などが関係していると考えられる。手話の系統と歴史的・地政学的要因の関係性について、さらなる研究につなげたい。

今回の研究では、22語に焦点を当てたが、今後は収録済みの他の語彙、例えば、色彩表現、数詞、食べ物、感情表現についても分析を進め、研究を深めていきたい。また、更に語彙レベルだけでなく、短文レベルで収集および分析を行うことも検討していきたい。このような研究を積み重ねていくことによって、アジア太平洋諸国の手話言語の特徴を示すことができるようになり、ヨーロッパで発達した国際手話とは異なる、アジア太平洋諸国の国際手話が発達していくきっかけにもなるであろう。

なお、本研究では、研究成果の一部として、2020年3月30日に『アジア太平洋諸国の手話』(Sign Languages in Asia and Pacific Countries)を発行した。この冊子では、研究期間中に現地で収集した22単語(家族関係11語、生活基本語11語)について、各国の手話表現を紹介し、手話の類似性や変種を研究した。それぞれの手話表現は、動作表現の説明を記述しながら写真で紹介しているが、実際の表現を収録したDVDを作成し、「家族関係」(DISC 1)と「生活基本語」(DISC 2)をセットにして添付している。

今後、アジアのろう者はさまざまな国際的会合を組織し、手話を使った交流の機会を増進するであろう。このような場では、お互いに相手の手話を学習しあう必要がある。この冊子がそのための一助となることを期待している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加藤三保子	4. 巻 第20巻第2号
2. 論文標題 書評：森壮也・佐々木倫子（編）『手話を言語と言うのなら』ひつじ書房，2016	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） jass.ne.jp	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 3件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 加藤三保子
2. 発表標題 アジア・太平洋諸国の手話：生活基本語の比較研究を中心に
3. 学会等名 第19回手話研究セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤三保子
2. 発表標題 手話とろう者社会～アジア太平洋地域における手話語彙調査から～
3. 学会等名 東アジア日本学研究会第2回国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤三保子
2. 発表標題 グローバル社会における日本語と日本手話
3. 学会等名 平成30年度札幌聴覚障害者協会手話通訳者現任研修会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤三保子
2. 発表標題 ことば（手話と音声言語）の仕組みとはたらき
3. 学会等名 平成30年度愛媛県聴覚ボランティア研修会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤三保子
2. 発表標題 手話と音声言語～日本手話言語法をめぐって～
3. 学会等名 東アジア日本学研究会第1回国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林昌之
2. 発表標題 中国の手話言語政策の現状と地方手話
3. 学会等名 全国手話研修センター日本手話研究所第18回手話研究セミナー
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林昌之
2. 発表標題 Accessibility for the Deaf : Formation of Sign Language Legislation
3. 学会等名 アジア経済研究所インクルーシブ教育ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小林昌之
2. 発表標題 中国におけるろう者のアクセシビリティ保障
3. 学会等名 日本貿易振興機構専門講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相良啓子
2. 発表標題 日本手話、台湾手話、韓国手話の二桁から四桁の数の表現における変化－「10」「100」「1000」に着目して－
3. 学会等名 国立民族学博物館研究報告
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相良啓子
2. 発表標題 Diachronic Changes in the Lexicons of Japanese Sign Language, Taiwan Sign Language and Korean Sign Language
3. 学会等名 SIGN9 conference, Warsaw (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相良啓子
2. 発表標題 日本手話、台湾手話、韓国手話の語における意味の変化
3. 学会等名 第157回日本語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相良啓子
2. 発表標題 日本手話、台湾手話、韓国手話の語の比較を可能とするコーパスのあり方を探る
3. 学会等名 HDCシンポジウム2018 特別セッションIII
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相良啓子
2. 発表標題 世界の手話における数のしくみ
3. 学会等名 神戸市ろうあ協会講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤三保子
2. 発表標題 日本における手話語句の改良と新造
3. 学会等名 第5回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masayuki Kobayashi
2. 発表標題 Legal Recognition of Sign Language: Experience of Japan
3. 学会等名 The 2nd ASEM High-level Meeting on Disability（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中山慎一郎
2. 発表標題 マレーシア手話とマレーシア国際手話の比較分析
3. 学会等名 平成29年度手話研究セミナー
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相良啓子
2. 発表標題 日本手話と台湾手話の比較を通して
3. 学会等名 第16回手話研究セミナー
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小林 昌之 (Kobayashi Masayuki) (60450467)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・新領域研究センター・主任調査研究員 (82512)	
研究 分担者	相良 啓子 (Sagara Keiko) (90748724)	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・特任助教 (64401)	
研究 協力者	中山 慎一郎 (Nakayama Shinichiro)	全国手話研修センター日本手話研究所・外国手話研究部・研究員	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	赤堀 仁美 (Akahori Hitomi)	学校法人明晴学園・教諭	
研究協力者	重田 千輝 (Shigeta Kazuki)	認定非営利団体法人障害者放送通信機構・ディレクター	